



Title	Lamia の'夢'
Author(s)	梅田, 宏
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1977, 17, p.83-94
Issue Date	1977
URL	http://hdl.handle.net/10069/9663
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-24T20:17:16Z

Lamia の ‘夢’

梅 田 宏

On Dreaming in *Lamia*

HIROSHI UMEDA

I. *Lamia* の ‘夢’ と *Hermes* の杖

UPON a time, before the faery broods
Drove Nymph and Satyr from the prosperous woods,
Before king Oberon's bright diadem,
Sceptre, and mantle, clasp'd with dewy gem,
Frighted away the Dryads and the Fauns
From rushes green, and brakes, and cowslip'd lawns,
The ever-smitten *Hermes* empty left
His golden throne, bent warm on amorous theft :
From high Olympus had he stolen light,
On this side of Jove's clouds, to escape the sight
Of his great summoner, and made retreat
Into a forest on the shores of Crete.

(I, 1-12)

「梔檀は双葉より芳し」とか、*Hermes* は、まだ、襁褓もとれぬ幼子の身で、兄 *Apollo* を騙したと伝えられる。この神は、兄が飼っていた50頭の牛を盗んで、だれに気付かれることもなく隠しおさせたのであった。それほどに、隠密のうちにおのれの目的を遂げることに長けた神のこと、みずからの施術が効を奏して、*Olympus* の山腹に日差しが陰ったのを好機とみて、一時の恋の衝動に駆られての人界への逃避行を決行したのであったが、その折の *Hermes* の姿を *Lamia* が見逃さなかったのは、さすがは、蛇の執念と言うべきかも知れない。しかしながら、このような *Lamia* の執念に驚きながらも、一方では、われわれは、作者 *Keats* が *Lamia* を放った作中の世界が、ギリシャ神話の伝承の世界であることを思うのである。すなわち、われわれは、*Lamia* が、まだ、*Zeus* の愛を一身に受けていたころ、みずからの眼球を思うがままに着脱しう

る特異な才能を、この主神によって与えられたことをも想起させられるのである。⁽¹⁾このことと合わせて、われわれは、Perseus のために虚を衝かれて Gorgon たちの居どころを、この英雄に告げねばならなくなった、三人で一個の眼球を共有していたと伝えられる、あの Graeae が、自分たちの眼球を自在に着脱し、たがいに授受し合っていたと言う言い伝えなどをも連想させられるのであるが、このような行為は、神話の世界では、ある特定の character の相互のあいだでの、単なる視覚的な能力の受け渡しを意味するにとどまらず、受け渡しされる能力が、千里眼的な透視力へと、発想上移行を見ることは、一つの自然な過程であると思われる。ましてや、奔放な心象を創造することに、日夜腐心する心的な傾向を持った詩人の想像力が、このような伝承をまえにして、作中に活かすために、食指を動かしたとしても不思議ではない。Lamia は、Hermes に向かって言う――

'Fair Hermes, crown'd with feathers, fluttering light,
 'I had a splendid *dream* of thee last night :
 'I saw thee sitting, on a throne of gold,
 'Among the Gods, upon Olympus old,
 'The only sad one ; for thou didst not hear
 'The soft, lute-finger'd Muses chaunting clear,
 'Nor even Apollo when he sang alone,
 'Deaf to his throbbing throat's long, long melodious moan.

(I, 68-75, 斜字体は筆者による)

Lamia の '夢' は、これぞと思うものを随意に捕捉しうる一種の透視の術であり、Hermes が Olympus の山から下界へと降下する様を、つぎのように捕えるのである。

'I *dreamt* I saw thee, robed in purple flakes,
 'Break amorous through the clouds, as morning breaks,
 'And, swiftly as a bright Phoebean dart,
 'Strike for the Cretan isle ; and here thou art !

(I, 76-79, 斜字体は筆者による)

さて、Hermes は、翼の生えたはきものを足にはいて飛びまわり、仙界のもめごとの重立ったものに数多顔を出し、これぞと思う側に加担して各地を旅行することが多かったから、道中、照りつける太陽の光をいくらかでも遮るために、ギリシャの旅行者が用いたひさしの広いかぶりものをかぶっていた。⁽²⁾このかぶりものは Perseus が Medusa の首を取って逃げ帰る折、みずからの姿を消すのに用いたことを見てもわかるとおり、隠れ蓑の役割を持っていたはずである。このようなわけで、Hermes は、人目を忍んでの逃避行には、絶対の自信があったであろう。ところが、おのれの姿を目撃した者が現われたのであるから、この神の、さすがの自信もぐらついたにちがいない。しかし、機転にかけては人後に落ちぬ Hermes のこと、Lamia の神通力を、お

のれの目的に役立つことを思いついたのは、当然すぎると言えるかも知れない。Hermes は、おのれの滑らかな舌のことは棚にあげ、もっぱら、Lamia の能力のことをほめあげて、籠絡することにとりかかるのである。

'Thou smooth-lipp'd serpent, surely high inspired !

'Thou beauteous wreath, with melancholy eyes,

'Possess whatever bliss thou canst devise,

'Telling me only where my nymph is fled,—

'Where she doth breathe !'

(I, 83-87)

もっとも、目指す nymph を見出しえぬままに、Crete の島の丘陵や溪谷のうえを、自慢のはきものはいて飛びまわっていた Hermes の念頭に、このような考えが浮かんだのは、Hermes にとっては思いがけなく、藪のなかで吐く Lamia のつぎのような独白が聞こえてきたためであった。

'When from this wreathed tomb shall I *awake* !

'When move in a sweet body fit for life,

'And love, and pleasure, and the ruddy strife

'Of hearts and lips ! Ah, miserable me !'

(I, 38-41, 斜字体は筆者による)

Apollo は、盗まれた牛を Hermes から返してもらおうとした際、このませた弟が掻き鳴らす豎琴の音に魅せられて、牛を弟にくれてやるかわりに、この魅力的な楽器を譲り受けたのであったが、豎琴を手ばなした Hermes が、自分で拵えて、吹いて遊びはじめた葦の笛を、こんどは欲しくなり、この方もまたもらい受けるかわりに、黄金で作った牛追いの杖を弟に与えたのであった。伝承によれば、この杖には、眠っている者を目覚めさせ、目覚めている者を眠らせる不思議な力がそなわっていたと言われる。Hermes が兄からもらい受けた、この 'caduceus' は、さきに触れたかぶりものやきものなどとともに、この神が常日頃身につけて手ばなさぬ、言わば '三種の神器' とも言える、便利な道具の一つとなった。もしも、Lamia が、蛇としての境遇を '夢' と考え、真実、目覚めることを希望しているのであれば、Hermes は、Lamia にとってこの上もなく好都合な手段を提供してやることのできる道理である。まして、Lamia の独白は、単なる独白と言うよりも、多分に相手を意識した、聞こえよがしの気味がないでもない。してみれば、相手が自分との交渉を望んでいることは、かなり明白であり、一時の浮気心で nymph を追いまわしているおのれの身に引きくらべれば、蛇の言葉には、苦悩の色さえ滲むほどに真実味がある、と Hermes は判断したのであろう。——このような Lamia は、Hermes にとってもまた、願ってもない取り引きの相手であった。

独白の主の姿を、作者は、つぎのように描いている。

She was a gordian shape of dazzling hue,
 Vermilion-spotted, golden, green, and blue ;
 Striped like a zebra, freckled like a pard,
 Eyed like a peacock, and all crimson barr'd ;
 And full of silver moons, that, as she breathed,
 Dissolv'd, or brighter shone, or interwreathed
 Their lustres with the gloomier tapestries——
 So rainbow-sided, touch'd with miseries,
 She seem'd, at once, some penanced lady elf,
 Some demon's mistress, or the demon's self.
 Upon her crest she wore a wannish fire
 Sprinkled with stars, like Ariadne's tiar :
 Her head was serpent, but ah, bitter-sweet !
 She had a woman's mouth with all its pearls complete :
 And for her eyes : what could such eyes do there
 But weep, and weep, that they were born so fair ?
 As Proserpine still weeps for her Sicilian air.

(I, 47-63)

仮に、Keats が、Lamia を描出するにあたって、神話の伝承に忠実であったとしたならば、ちょうど、人魚の下半身を蛇身におきかえた態の異形の者が、おのれの眼球を着脱し授受する様を描くにあたっては、いかに、‘すべての不快なるものを昇華せしめる’ことを一つの理想とした彼の筆力を以ってしても⁽³⁾、醜怪な印象を読者に与えないためには、局部的な工夫だけでは十分に目的を達しえなかったであろう。そこへいくと、わずかに眼と口だけに人間の女の痕跡を残すにとどまり、両腕を有しない Keats の Lamia は、眼球の着脱授受と言う、いかにも grotesque な行為を行う能力を、そもそも、物理的に欠いていることになる。透視力を委譲するための手続きを、Hermes の両眼に蛇が息を吹きかける優雅なものにするために、作者はこのような用意をおこなったものと察せられる。一方、Hermes が、Lamia を、彼女の言う‘夢’から目覚めさせる手続きは、まったく型通りに行なわれたと見ることが出来る。ただし、互恵的な取り引きのための、このような ceremonious な所作が、Keats の描く Lamia の場合には、著しい生命力の消耗を強いたかのようにであった。みずからの力で透視をおこなう限りにおいては融通自在であった妖怪も、他へこの力を委譲することは、よほど心身の両面で、いのちがけの業であったと見え、ちょうど、自衛の本能に従ったあとの蜜蜂さながらの姿となる。この姿を、われわれは、作者の一つの創意と考えなければならない。このあと、二度目の変容を遂げた Lamia が、超自然的な

力を一切喪失してしまうわけでは決していない。なるほど、人界に住んでのちも、Lamia は人間たちに限りなく幻影を与えつづける。しかし、覚めれば'夢'を見ぬは道理と言うべきか、すくなくとも、この物語のなかで、Lamia の感覚が、ふたたび、radar のように働くことはない。このことが、第二の変容のあとで、Lamia の妖怪性を、かなりの度合減殺する働きをしていることにわれわれは注目したい。Lamia に対してわれわれが抱く人間的共感、案外、このような、些細な事情に端を発しているのかも知れない。そこには、普通には得がたい mystic な能力の一つを犠牲にしてまで、人間らしい希望に生きようとする、一途に思いつめた一個の生命の姿があり、物語の結末における彼女の運命と思い合わせて哀れむべきである。

II. Lamia の identity

伝承によれば、Lamia は、Zeus とのあいだに、数人の児をもうけていたと言われる。主神のこのような寵愛が、結果的には彼女の不幸の原因となった。すなわち、嫉妬にかられた Hera が一児を残し、Lamia の他の児等を殺害するに及んで、Lamia は復讐の悪鬼と化してしまう。自暴自棄となった彼女の憎悪は、みずからを外道に墮として罪業を重ねる形をとり、多くの若者が、彼女の色香にまよわされたあげく、同衾中に命を落とし、人人は彼女を吸血鬼として恐れた。性的な愛情が結果としてもたらした不幸に、性的憎悪を以てした彼女の報復手段は、犠牲者の側に性的な誘引を受けやすい要素がなければ成立しないはずのものであることは言うまでもないが、Lamia の側にも陰惨な色欲にまつわる動機が皆無であったとは言い切れないものを感じる。しかし、ここは、いわゆる恋愛感情などと言うものの存在が、Lamia の側に認められうる局面ではありえない。Lamia を創作するにあたって、作者が下敷きにしたことが、作者自身の意志表示によって明らかにされているところの、Robert Burton の奇書、*The Anatomy of Melancholy* のなかの一挿話についても同様のことが言われうるであろう。⁽⁴⁾ このような context において

'I was a woman, let me have once more

'A woman's shape, and charming as before.

'I love a youth of Corinth — O the bliss!

'Give me my woman's form, and place me where he is.

(I, 117-120)

と言う蛇の恋の告白を聞くと、われわれは、作者の創意のなかに、強い意外性を感じるのである。

Lamia の透視術に捕えられたのは、Hermes ばかりではなかった。むしろ、Lamia の告白にある青年の姿を、彼女の神秘的な網膜が映し出したことが、Hermes をこのような形で捕捉する誘因となったと思われる。

first 'tis fit to tell how she could muse

And dream, when in the serpent prison-house,

Of all she list, strange or magnificent :
 How, ever, where she will'd, her spirit went ;
 Whether to faint Elysium, or where
 Down through tress-lifting waves the Nereids fair
 Wind into Thetis' bower by many a pearly stair ;
 Or where God Bacchus drains his cups divine,
 Stretch'd out, at ease, beneath a glutinous pine ;
 Or where in Pluto's gardens palatine
 Mulciber's columns gleam in far piazzian line.

(I, 202-212)

と作者も言っているように、Lamia の 'radar' の機能は、ただ盲目的に働いているのではなく、必要があれば、自己の本来の運命になんらかの形で関わってくる因子を予測し、選択して映像化する、超高度な方向性を有しているものようである。

And sometimes into cities she would send
 Her dream, with feast and rioting to blend ;
 And once, while among mortals dreaming thus,
 She saw the young Corinthian Lycius
 Charioting foremost in the envious race,
 Like a young Jove with calm uneager face,
 And fell into a swooning love of him.

(I, 213-219)

しかし、どんなに、Lamia の恋慕の情が、矢も楯もたまらぬほどに募ろうと、愛する男のまえに、思うままに姿を見せることを彼女にためらわせていたのは、ほかならぬわが身の醜さであった。前章において、すでに筆者が引用したが、Keats が描く Lamia は、'penanced lady' であるが 'elf' なのであり、ある者の 'mistress' ではあっても 'mistress' としての彼女の相手である 'demon' の影が彼女の姿の上には色濃く落ちているのである。Lamia の恋心の純粹さが、おそらくそこから発するものと思われる彼女の前身の清らかさは、悲運な変身のめぐりあわせに弄ばれて、心ならずも彼女が甘受せねばならなかった蛇身と言う忌むべき第二の identity に部厚く積もって蛇の艶姿を描き出している毒毒しい絵の具の下で、辛うじて窒息をまぬがれているにすぎない。意にそわぬおのれの姿に、Lamia の、女としての心は苦しんでいたのであった。そして、この苦渋と、人間性への郷愁とが、Lamia に Hermes との思い切った取り引きを思い立たせたのであった。Lamia は、Hermes の力によって、希望どおりに、彼女の、いわゆる '夢' から目覚め、彼女の前身を回復するのである。

Ah, happy Lycius ! —for she was a maid

More beautiful than ever twisted braid,
 Or sigh'd, or blush'd or on spring-flowered lea
 Spread a green kirtle to the minstrelsy :
 A virgin purest lipp'd, yet in the lore
 Of love deep learned to the red heart's core :
 Not one hour old, yet of scintillating brain
 To unperplex bliss from its neighbour pain ;
 Define their pettish limits, and estrange
 Their points of contact, and swift counterchange ;
 Intrigue with the specious chaos, and dispart
 Its most ambiguous atoms with sure art ;
 As though in Cupid's college she had spent
 Sweet days a lovely graduate, still unshent,
 And kept his rosy terms in idle languishment.

(I, 185-199)

なるほど、思いかなった Lamia の美しい姿には、'serpent prison-house' の暗さはない。しかし、これを以って、彼女が妖怪と変ずるまえの精神性を、昔のままに回復しえたと速断することはできない。D. G. Gillham は、Keats の「1820年詩集」を評釈したなかで、上掲箇所189行目以下に注を付し、Lamia is both innocent and experienced so that although 'unshent' (unspoiled) she knows how to impart pleasures so subtle that only her skill could disentangle them in that chaotic realm of sensation where pain and pleasure are akin.⁽⁵⁾と云っている。妖怪と化した Lamia が、若い女の純情さを忘れていなかったように、ふたたび美女と化した Lamia は、蛇の伶俐さをも忘れえないのである。先立つ identity は、いくたび外観上の変容を遂げようと、重なり合って、いま在る存在のなかに影を落とし、生命をえている。——この事実のなかに、Lamia の持つ妖怪性の真の秘密があるのである。

III. Lycius の 死

人間とのかかわりあいにおいて、妖怪には、人間に直接的に危害を及ぼす一面と、危害を及ぼすことはないが、不識の間に、人間の運命を変更しうる一面との両面の性質があるように思われる。再度の変容を経たあとの Lamia は、姿かたちは美しくとも、内面的には、後発的な蛇の identity を、先行する人間の identity の上に重ね合わせた二重人格性を有しているために、人間にとって危険な側面が、願望をかなえられた Lamia の一時の上機嫌によって、辛うじて表面化することを抑えられているだけにすぎないのではないかと言う一応きわめて当然の危惧の念を抱きつつ、われわれは Lamia の Lycius に対する特異な交渉の drama をたどって行くことに

なる。

異類が女性の姿をかりて人間界に住み、男性と特異な交渉を持つと言うような話は、洋の東西を問わず、一つの文学上の類型となって確立しているように思われる。異類として蛇が登場するものでは、本邦においても、江戸時代中期の作家である上田秋成の短篇小説「蛇性の姪」がある。これは、秋成が、1776年に公にした九篇の怪異小説をおさめた小説集『雨月物語』の第四巻を単独に構成する物語で、蛇と一男性との人畜交情を題材としている点で、Lamia と相通ずるものを持っている。「蛇性の姪」は、豊雄と言う紀州の青年が、蛇に懸想されて、蛇の化身である真名子（まなご）と言う美女と特異な交渉を持つ話である。この豊雄と言うのが、網元の息子と言う境涯に似合わず、師事している学問上の師を持っていると言うところなども、Lycius の場合と似かよっていて興味深い。Lycius がまず、Lamia によって懸想されたように、この話でも、積極性があったのは、もちろん真名子の方で、自分の正体を知ってなんとか逃がれようと腐心する豊雄を執念深く追いつめて、脅し、搔き口説き、独占しようとする。武士たちや、神官や、法師らの力によって真名子から逃がれること三度に及んだが、その都度、妖怪は力を回復し、豊雄にまといつく、四たび目に、ようやくにして、一老僧による法験あらたかとなり、妖怪は封じ込められて、めでたい結末となるのであるが、最初の法師などは一命を落とし、最後には、豊雄は生きのびたものの、豊雄の新妻は蛇に取り憑かれたことが原因で病を得、没している。——あえて、真名子の立場から、この物語の劇的要素について考察を試みるならば、もしも、豊雄の周囲の者たちが、せめて真名子を窮地に追い込まない程度の好意でも示していたならば、豊雄は、生涯、真名子の正体を察知することなく、すべては円満に完結し、悲劇的要素を指摘することは困難であろう。これは、人生の教訓の一つであろうが、同様に、もしも、Apollonius が、賢しらに、Lamia の正体をあばきたてることがなかったならば、Lycius の運命は悲劇的な結末を見ることはなかったことと思われる。真名子や Lamia には、あの *La Belle Dame sans Merci* のなかの faery のように、白昼の通り魔さながらに人命を奪うに至る害心は、本来は、無いのである。

Lamia が、目指す Lycius に近づくにあって、ambush 紛いの方法をとったことは、二度目の変容のあとで彼女が回復した容姿の美しさにひきくらべて、ひどくそぐわない感じをわれわれに与える。Lamia の Lycius を慕う動機の純粋さをわれわれは知るだけに、彼女の実際面での物馴れた行動力には、われわれはひどく違和感を覚える。のみならず、彼女には、Hermes が、‘smooth-lipped serpent’ と、寸言を以っていみじくも評したように、とどまるどころを知らぬ饒舌があった。ちょうど、真名子が、自分を妖怪ではないかと疑う豊雄らの疑心を解くにあって言葉たくみであったのに劣らぬ弁舌を以って、山中、あまり突然の Lamia の出現に、一時は妖精ではないかと疑う Lycius の疑心を、Lamia は晴らそうとするのである。

And then she whisper'd in such trembling tone,
As those who, safe together met alone
For the first time through many anguish'd days,

Use other speech than looks ; bidding him raise
 His drooping head, and clear his soul of doubt,
 For that she was a woman, and without
 Any more subtle fluid in her veins
 Than throbbing blood, and that the self-same pains
 Inhabited her frail-strung heart as his.

(I, 301-309)

また、真名子の正体を知ってのちの豊雄が、真名子を恐れ、遠ざかろうとしたことが、真名子の悲劇をもたらしたのと同様の結果になることを恐れた Lamia は、極力、自分の正体をそぶりに出さないように心がけ、つとめて人間らしくふるまおうとする。

Let the mad poets say whate'er they please
 Of the sweets of Faeries, Peris, Goddesses,
 There is not such a treat among them all,
 Haunters of cavern, lake, and waterfall,
 As a real woman, lineal indeed
 From Pyrrha's pebbles or old Adam's seed.
 Thus gentle Lamia judg'd, and judg'd aright,
 That Lycius could not love in half a fright,
 So threw the goddess off, and won his heart
 More pleasantly by playing woman's part,
 With no more awe than what her beauty gave,
 That, while it smote, still guaranteed to save.

(I, 328-339)

自分を慕う Lamia の純情さに心ひかされ、純情さにはおよそ似つかわしからぬ老練な手管に盲目にされた Lycius は、恋の甘美さに魅せられ始める。Lycius は、Corinth までの道の遠さが、彼女の足の負担になるのではないかと気をつかうが、Lamia が、その距離を、ほんの数歩で行けるほどに縮める妖術を使ったことにも気がつかない。警戒心を失った Lycius は、ちょうど、あの ballad のなかで 'knight-at-arms' が、'La Belle Dame sans Merci' に導かれて、彼女の 'elfin grot' の客となったように、Lamia の妖術が、ところもあろうに、Corinth の街なかに、蜃気楼のように生み出した壮麗なやかたに伴われて行き、官能の時を過ごすのであるが、そのあと、騎士の場合、幸運にも、魔性の女の陥穽を、辛くも逃がれうるきっかけとなった、あの覚めた意識の瞬間が、Lycius にも訪れる。しかし、魔性の女が騎士とのつながりを官能のなかにかのみ求めていたのに対して、Lycius を心から慕う Lamia は、Lycius の心のなかにさす、わずかな情熱のかげりをも見落とさなかった。

For the first time, since first he harbour'd in
 That purple-lined palace of sweet sin,
 His spirit pass'd beyond its golden bourn
 Into the noisy world almost forsworn.
 The lady, ever watchful, penetrant,
 Saw this with pain, so arguing a want
 Of something more, more than her empery
 Of joys ; and she began to moan and sigh
 Because he mused beyond her, knowing well
 That but a moment's thought is passion's passing bell.

(II, 30-39)

Keats の ballad で、'elfin-grot' のなかに横たわる、憐れな犠牲者たちの空ろに開いた口に 'horrid warning' を見てとった騎士の理性を、Lamia の深いなさけが、Lycius からは奪ったのであった。すでに、Corinth の街に Lamia と相伴って帰って来たとき、日頃、みずからの人生と学問の師として尊敬し、信頼していた Apollonius が、

'The ghost of folly haunting my sweet dreams.'

(I, 377)

として Lycius の目に映じたとき、悲劇的な結末へ向かって、Lycius の運命は傾斜し始めていたと言える。Lamia が Hermes に与えた '夢' は、作者が、いみじくも

It was no dream ; or say a dream it was,
 Real are the dreams of Gods, and smoothly pass
 Their pleasures in a long immortal dream.

(I, 126-128)

と言っているように、自然界の法則の支配を受けぬ点、人間の夢とは異質のものであった。'serpent prison-house' の '夢' から覚めることを念じ、Hermes の caduceus の力を借りて人間界の住人となった妖怪の運命の皮肉は、おのれの最後の 'real' な '夢' のつづきを、いつまでも見つけづけるために、人間にとっては所詮虚妄にすぎない '夢' を、際限なく、愛する男に与えつづけねばならなかったことであった。人界における '夢' が虚妄にすぎないことは、Lamia が、たれよりも良くわきまえていたことと思われる。であればこそ、彼女は Apollonius を恐れたのであった。Lycius の結婚の申し込みには当惑しなかった彼女が、結婚の式を内輪な形式におさめることには、それこそ、必死にこだわったのは、自分たちの晴れ姿を見ようとして集ってくる人人のなかに、'夢' を極力遠ざけ、覚めた理性に徹する心的な傾向を持つ人間がまぎれ込むことを、Lamia が嫌ったからにはほかならない。しかし、Lamia のこのような悩みを Lycius は知る由もなく、Lamia の嘆願に逆らって、Lycius は、式をおのれの意志どおりに挙げようとする。やむ

なく、Lamia は豪奢な、まやかしの宴席を、またまた現出せしめ、婚礼と披露とに備えるのである。

The day appear'd, and all the gossip rout.
 O senseless Lycius! Madman! wherefore flout
 The silent-blessing fate, warm cloister'd hours,
 And show to common eyes these secret bowers?
 The herd approach'd; each guest, with busy brain,
 Arriving at the portal, gaz'd amain,
 And enter'd marveling: for they knew the street,
 Remember'd it from childhood all complete
 Without a gap, yet ne'er before had seen
 That royal porch, that high-built fair demesne;
 So in they hurried all, maz'd, curious and keen:
 Save one, who look'd thereon with eye severe,
 And with calm-planted steps walk'd in austere;
 'Twas Apollonius:

(II, 146-159)

Lamia の恐れていたことが現実となり、彼女がこの地上に描き出した '夢' は、彼女自身の姿もろともに、時の経過に耐ええぬ虹のように、みるみる生彩を失って行く。

'Begone, foul dream!'

(II, 271)

と Lycius は絶叫する。しかし、Lycius は、彼なりに '夢' と呼んだものが、彼の現実にとって代わりつつあることに気がつかない。心ない人間にとっては、所詮、虚妄でしかないおのれの姿を Apollonius の眼力に見破られて、Lamia が人界から姿を消したあとに、Lamia の '夢' の忘れ形見のように、さすがの Apollonius の知力を以ってしても説明が不可能と思われる仙界の消息の一端が、恐るべき形で残される。——ギリシャにおいて信じられた仙界に関する言い伝えのとおり、Lamia の犠牲者の一人に、新たに Lycius が加えられたのであった。

テキストは、Oxford Standard Authors Series のなかの、H. W. Garrod による版を使用。

注

- (1) Robert Graves: *The Greek Myths: I* (Penguin Books, 1955), p. 205.
- (2) 吳茂一著『ギリシア神話』(昭和31年, 新潮社) 上巻, 151頁参照.
- (3) Hyder E Rollins, ed., *The Letters of John Keats I* (1958, Harvard U. P.), p. 192.
- (4) Robert Burton: *The Anatomy of Melancholy* (Everyman's Library), vol. 3, pp. 46-47.
- (5) D. G. Gillham, ed., *Keats/Poems of 1820* (Collins, 1969), p. 137.

(昭和51年9月29日受理)